

《最優秀賞》

「戒石銘の願い」 二本松第一中学校 一年 齋藤 莉央

緑あふれるお城山。ここは、私が二本松の中で一番好きな場所だ。これまで何度も見てきた入り口にある「戒石銘」について、私は初めてよく考えた。

この「戒石銘」に刻まれた四句十六字には「武士の給料は、民があぶらして働いたたまものから得ているのである。おまえは民に対し感謝し、いたわらねばならない。この気持ちを忘れて弱い民たちを虐げたりすると、きっと天罰があるだろう」という意味があるという。私はこの意味を知ってはっとした――。

私は中学校に入って、バドミントン部と特設陸上部に所属した。それらの活動では始終先生や先輩からのアドバイスをいただいたらしっかり挨拶をするなど礼儀を大切にするように教えられている。はじめは恥ずかしかった返事も今では自然にできるようになった。でも、家ではどうだろう。帰ったら宿題をして、ご飯を食べて、時間があればSNSに夢中になって過ごして、やっってもらうのが当たり前になっている自分がいた。「ありがとう」と伝えたのはいつだったろう。そんなことをぼんやりと考えた。天は私を見て、がっかり

していることだろう。二本松に生まれて、今もなお受け継がれている教えを守っていない自分のことが恥ずかしく思えた。「このままではイヤだな」心からそう思った。

では、どうすれば二本松の人として、「戒石銘」の教えを守ることが出来るだろうか。まずは、「ありがとう」この一言から始めようと思った。家でも学校でも、はじめは照れくさかった「ありがとう」の言葉だったが、毎日意識して言葉にするようにしたら、部活の礼儀のように自然と言葉にできるようになった。周りからも「ありがとう」と言われることに気づくようになり、気持ちよくあったかい気持ちで過ごせるようになっていく。

こんなこともあった。部活動が早めに終わった日のことだ。母に感謝の気持ちを伝えたいと思って、自分から皿洗いをした。皿を洗い終えたころ、仕事から帰ってきた母が、目を大きくして、にっこり笑ってこう言った。

「えっ、急にどうしたの。ありがとう。」

私はとてもうれしくなった。もっといろいろな手伝いをして感謝の気持ちを伝えていこうと思った。その夜、母に学校で学んだ「戒石銘」のことを話した。すると母は、

「二本松少年隊もあの戒石銘を見て育ったんだよ。二本松では感謝の気持ちを大切にしてきたんだね。」

と納得したようにうなずきながら話していた。

そのとき、私は小学校五・六年生の子に入っていた「剣舞クラブ」のことを思い出した。私は、二本松少年隊を偲んで袴をはき、舞を披露していた。練習の時、先生はいつも「礼儀、挨拶を絶対に忘れないように」と言葉にして教えてくれていた。「戒石銘」に刻まれている言葉には、「感謝」や「いたわる気持ち」をもって相手と関わることを伝えている。遠い昔の二本松少年隊も私たちのようにこの言葉の意味を知って、感謝の気持ちをもって生きていこうと誓ったに違いない。今を生きる私たちも同じ言葉を見て、「感謝」の気持ちでよりよい二本松を作ろうとしていることに不思議な連帯感を感じた。

「戒石銘」は今も昔も変わらずお城山にあって、二本松に生きる人々に「感謝」という二文字を忘れずに生活していくようにと伝えている。私たちは今、何不自由なく生活ができることに感謝しなければならない。毎日、学校に通って学べることに感謝しなければならない。そして、感謝の気持ちを言葉で伝えなければならない。きっと「戒石銘」は「ありがとう」であふれる二本松市になることを願っているはずだから――。私は「ありがとう」と感謝の気持ちを言葉で伝える人になることを「戒石銘」に誓う。